

風土



柳
絮
神蔵
器

長命寺にて 二句

植木市のぞく波郷とすれ違ふ

境内に木遣地蔵や猫の恋

かげらふの寸伸したり父母の墓

東門居亡くて臙の滑川

春寒し兄が遺作の竹箒

地虫出て遠雪嶺をかがやかす

大塔宮護良親王妃 無生野 二句

おくつきを春の時雨の後に訪ふ

雛鶴姫の墓熱うする春の雨

三極の万の花房雨滴こらふ

復元の古代住居や雀の子

月上げて武蔵は櫻並木かな

かにかくに恋の白川柳絮とぶ



竹間集

同人作品



鳥の恋

大竹 淑子

六道の辻曲がりては風花す
浅春の北野に晴れを賜ひけり
臘梅や透塀漏るる欄宜太鼓
鳥居より松に移れり恋雀
鶏鳴や谿を急げる雪解水
流れあるところあたたか露の臺
山里に土蔵多し鳥の恋

梅が散る

齊藤 小夜

泣きやみて涙大粒冬すみれ
山鳩の餌の催促や春隣
利久忌や道歌百首を身のうちに
雨上るうるみて一つ春の星
貝合せ香合飾る雛の前
梅が散る記憶をひとつづつ消すやうに
絵唐津の湯呑み愛する春の夜半

冴返る

徳丸 峻一

春近き浮棧橋を鳩歩く
花菜漬湖の景称へつつ
渡り板撥ね遠足の列通す
バレンタインの日や下駄履に町歩く
踏切に電車来る間の春の星
校了のゲラ刷を置き春炬燵
消しゴムに揺るる机や冴返る

鳥帰る頃

— 山田 暢子 —

碧き空梳かむと芽柳揺れはじむ
追ひかけて追はるる心草萌ゆる
鳥雲や交番に訊く旧居跡
菊坂に一葉のこゑ木々芽吹く
春昼や古井戸に路地行き止まる
「飲めません」井戸に貼紙蝶の昼
路地より路地戸ごとに芽ぐむ鉢並べ
あたたかや喇叭鳴らして豆腐売り
かげらふの坂一葉の下駄の音
燕来る日のため玻璃戸磨きおく

天辺に青のふえゆく葱坊主
春愁や白き錠剤てのひらに
一日のまた過ぎてゆく花菜漬
三代で暮せし頃や春の雁
墓のみとなりしふるさと辛夷咲く
蒲公英や胸の中まで川流れ
春潮やふくも絹女も連れ歩く
こころふと旅へ出てゆく松の花
鳥帰るそろそろ手紙書かむとす
春夕焼らんぷを吊したくなりぬ

山河集

同人作品



神蔵
器選

山鳩の啼けば瞬くふきのたう
柴田 久子

真蛭を洗ひてくらきたなごころ
米を磨ぐやうに蛭を洗ひけり
竜天に登りコピー機うなりだす
啓蟄やふんはり乾くバスタオル

水音のする方へ方へと梅探る
橋添やよひ

炭竈の罅あらはなる雲雀東風

北野天齋 三句

三齋井連 歌井址 碑 桜 東風
土蜘蛛の塚の傾ぎや涅槃 西風
水干の美男より買ふ懸想文

湯河原

春の海激しき雨の降りにけり

平田紀美子

山門の暗さや椿咲いてをり
砂吐かす貝の水かへ寒明くる
野焼して帰る漢とすれ違ふ
立春の帝釈天に肉桂飴

蒲公英や笑ひ転げし女の子
島田 和子

八幡宮の磴のぼり行く実朝忌
椿の名書き留めてをり大巧寺
追伸に書く一行や下萌ゆる

城願寺

土肥一族の墓五十基や冴返る

全集の帯の十色や囀れり
岩田 都女

如月のくれなゐほのと加賀落雁
水温むボトル・キープに亡夫の名
さがみてふ粹あつめぬて雛の宿
受験生一番星にこゑをかけ



◆特別作品抄◆

尾参旅情

忠臣の死して生かせし長元坊
腹切つて諫めし家臣池紅葉
諫臣の館奈辺に秋祭
降りしきる枯葉病葉戦跡
血の池の紅葉血の色古戦場
血の色に変わるてふ池散紅葉
塚紅葉碑の幼名に涙せり
父子ともに討死の塚柿落葉
花八手心経ひびく老の坂
弘法の頭上に集ふ冬鴉

吉田 王里



風土独語／神蔵 器



山鳩の啼けば瞬くふきのたう

柴田 久子

一枚板のように薄く消え残った雪の下から、黄の電灯が点つたようにぼーっと明るさを滲ませている露の臺。また東京あたりで言えば、まだ冬の景色のままの庭隅などに、思いがけなく露の臺を見出し出した時の感動、喜びは何とも言いようがない。

一つ蛇足を加えれば、この句は「鳩」では全く駄目で「山鳩」で成功している。同じようなものかも知れないが、山鳩は山に棲む、すくなくとも野生の鳩で、冬の厳しさを自分の力、自分の才覚で生き抜いて来た鳩である。そうした山鳩であるからこそ、ふきのとうと一瞬通じ合う春を待ちつづけて来たいのちの瞬きがあるのだ。そしてふきのとうの瞬きは同時に作者の瞬きであり、春を迎える喜びでもある。蛇足の上の蛇足だが、中七の「ば」の使い方はまことにむずかしい。龍太先生の「咲けば」の呼吸を参考にしていただきたい。

返り花咲けば小さな山のご糸

龍太

雪重し 日本列島 傾きぬ

高野 明子

この冬の新潟を中心とした日本列島の日本海側の豪雪は、気象

観測史上はじめてということ、死者も百十数名にのぼった。しかも犠牲者の多くは七十歳を越えるお年寄りであったことはいたましいかぎりである。

掲出句は作者の感覚で、日本列島が傾くなどということはあり得ることではないが、前述のような豪雪の重みに日本列島が傾くという作者の感覚に、私たちは等しく共感する。決して嘘でもオーバーな表現でもない。素直な表現である。

春一番牛乳ふかせてしまひけり

平田紀美子

日常生活の何でもない一齣である。作者のご家庭では、朝食はパンにする時が多く、パン食の時は牛乳が欠かせない。当然牛乳は温めるわけであるが、生ぬるいものは嫌われるだろうし、かと言って舌を焼くほど熱く沸騰させてしまつてはどうしようもない。

作者はいつもの通り、牛乳をガスこんろにかけていた。一番忙しい時間だが、作者はこんろの前についてじっと牛乳を見詰めていた。そろそろいいかな、と思ひ火を止めようとした時、ふと背後に風の気配を感じた。春一番か、そう思った時、作者はふり向いてしまった。ほんの一瞬のことである。(以下略)

風土集



神蔵 器選

海荒るる日は美しき山椿 横須賀

平田紀美子

みつまたの花咲く雨の光則寺

林 いづみ

たんぼぼの絮翔びたくて風を待つ

たんぼぼや扉を持たぬ農具小屋 東京

円覚寺の梅は紅梅なかりけり

下萌ゆる湯掛け地蔵の祭かな

春一番牛乳ふかせてしまひけり

物干して生るる影や地虫出づ

雪重し日本列島傾きぬ 東京

高野 明子

漣のきらめき透し河津桜

検診を終へて四温の街へ出る 千葉

上村 葉子

遠目にも正月桜の赤さかな

古書店の奥行き深し余寒なほ

紅白梅絵馬掛け大きな鎧ぶり

花言葉「希望」美し桜草

春雨や終る書展と開く書展

下萌や夫と歩ける一万歩

雨粒のひとつに当り実朝忌 横浜

中村 洋子

缶切りのうしろもどりや実朝忌

チヨコレート選るも楽しき二月かな

鎌倉虚子立子記念館

森蔵寺針供養 四句

立春大吉星野立子の硯箱

護摩焚の指ひらひらと春めきぬ 東京

奥田 茶々

春浅し立子の眼鏡ケースかな

悪筆の護摩木も積みぬ路の臺

路の臺雅楽の笛の揃ひ来る